留学生同士の教え合いで、授業に活気が出た

2016年度秋学期ティーチングアワード受賞
対象科目：情報管理

本学のアジア展開の拠点として北九州に設立された情報生産システム研究科には、中国をはじめ海外留学生が多数在籍している。立野准教授の授業では、留学生同士でのディスカッションによる教え合いを奨励することで、積極的な参加と学習効果の向上が見られたという。

立野繁之
理工学術院准教授

演習問題をグループ単位で競わせる

今回受賞した「情報管理」という科目は、主に文系出身の学生を対象に、通信の仕組みやセキュリティ、無線の設定方法などについて教えている。例年は他の教員と2人で担当しているが、2016年度はサバティカル休暇で不在だったため、立野准教授がひとりで受け持つことになった。そこで時間的な余裕が生まれたことから、授業内に学生同士で教え合う時間を設けたところ、大きな成果が見られたという。

元々、立野准教授の担当する授業はすべて6限目に設定している。その理由は、後の授業を気にすることなく延長できるからだ。通常1時間弱の講義を行った後、各自で演習問題を解き、ひとりずつ教員へ提出。合格しないと帰れないため、理解不足の学生はできるまで30分から1時間ほど居残りをするケースもある。演習を重んじているのは、「身に付けた知識は使わないと意味がない」という思いによるものだ。

2016年度は時間的余裕があったことから、クラス内を5つぐらいのグループに分け、グループ内で分からない人は分かった人に教えてよいことにした。原則として、答えではなく解き方を教えてほしいと伝えている。グループを作ることで学生間の距離も縮まり、積極的に教え合いが進んで居残り組も減ったという。

あまり熱心に参加していない学生をあえてチームのリーダーに指名することもある。

「最初は面倒臭そうな顔をしていても、まとめ役を与えられると、意外に積極的に発言するようになってくれたのは良かったですね」。

さらに、グループによって競わせるポイント制も導入したところ、競争のモチベーションが上がり、より熱心に教え合う姿が見られた。

「グループの順位がそのまま成績に反映されることはないのですが、単純に負けたくないという気持ちが働いて、競争そのものを楽しんでいるようです」。

英語の理解力不足を、学生同士の母語で補う

教え合いが成功した要因は、履修学生の全員が留

学生、それも中国や台湾といった中国語母語話者だったことも影響していると、立野准教授は感じている。

「私もそこまで英語が堪能ではないので、細かいニュアンスを伝えきれないと感じることがあります。そういうときには、分かっている学生に直接彼らの母語で説明してもらえば理解が深まるのだと思います」。

講義中も、たとえば言葉の説明をするときなどに、時間を設けてグループ内で教え合いを促すことがある。

「私が一方的に話すだけではあまり聞いていない学生もいたので、いっそのこと彼らにもしゃべる時間を作ることで、学習意欲が高まるのではないかと考えました。日本語も英語もよく分からない学生にとっては、すぐそばの人が母語で教えてくれるというのは大きな助けになるでしょう」。

ただし、教員と学生との言語の壁は課題でもあるという。学生も教員もネイティブ話者ではないという状況で、英語でのコミュニケーションには限界も感じているからだ。

「どこまで理解しているのか分からないのがもどかしいですね。学生の方でも聞きたいことをうまく質問できないように見受けられることもあります。そこをもう少しうまく意思疎通できるような方法が見つかるといいなと思っています」。

分かっている学生も
教えることで理解が深まる

教え合いをさせるようになってから、学生からの発言が増え、授業の雰囲気にも活気が出てきたと手応えを感じているそうだ。

「私に対しても分からないところを聞いてくるようになりました。学生同士の会話は中国語なので私には理解できませんが、ノートを取りながら話すなど、とても積極的に取り組んでいるようです。近づいて聞いてみると、自分たちの考えていることを声に出して話してくれるようになったのはうれしいです」。

学生同士の教え合いを導入した背景には、学生間の学力差という問題もある。特に最近は、できる学生とそうでない学生との間の格差を感じるという。そうした事情もあり、分かっている学生が母語で教えるという試みが功を奏しているようだ。

分かっている学生も他の学生からの質問を受けて初めて、自分も理解が不足している点に気づくこともある。すなわち、教える側の学生にとっても、教え合いは理解を深める効果を上げていることになる。

2人の教員体制に戻ると、2017年度のように授業中にディスカッションの時間を設けて教え合いをする余裕がなくなる。

「今後は、短時間でうまく実施する方法を考えていきたいですね」。